

令和6年度 埼玉県農業大学校評価システムシート

教 育 方 針		1 農業経営に必要な技術と知識を備えた実践力のある人材の育成 2 グローバルな視点と企業的経営感覚を身につけた人材の育成 3 地域農業の持続的発展をけん引するリーダーの育成			教 育 方 法		1 課題解決型学習を基軸として実践教育を行う 2 講義、実習、農家研修を効果的に組み合わせる各人の能力に応じた教育を行う。 3 農業法人経営者、流通販売企業家など第一線の外部講師を活用する。 4 農業経営者育成のためのカリキュラムを編成し必要な免許・資格取得を支援する。		
重 点 目 標		1 学生の意向を踏まえた進路指導 2 大学校のDX化 3 学習環境の整備 4 埼玉農業の担い手となる学生の確保 5 本校職員の負担軽減			達成度		A 達成(100%以上) B 概ね達成(80～99%以上) C 不十分(80%未満)		
学 校 自 己 評 価									
年 度 目 標					年 度 評 価 (2 月 2 0 日 現 在)				
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策		
1	【現状】 2年課程の学生は高卒者が多く、平均年齢は約20歳となっている。一方、1年課程の学生は4大卒や社会人、定年後等様々で、平均年齢は約40歳である。 また、入学生のうち非農家出身者は7～8割となっており、その割合は年々増加している。 【課題】 学生の進路を早期に確定するとともに、確実に就農希望地で就農に結び付ける必要がある。	進路決定率 100% 就農率 70%以上	①進路指導 ・コース別学習（自営就農、農家子弟、就職就農、関連産業）の実施 ・キャリアコンサルタントによる指導 ②就農支援 ・就職就農を含む就農支援 ・農業法人等見学会・説明会 ・チャレンジファーム(校内の余剰ほ場を利用した授業外での営農実践)の実施 ③資格取得支援 ・農業に関する資格取得の講習	①進路指導 ・コース別学習が実施できたか、実施後の学生満足度は ・キャリアコンサルタントによる指導回数 ②就農支援 ・計画どおりの就農支援活動ができたか ・チャレンジファームの実績 ③資格取得支援 ・学生1人当たりの資格取得数（平年並みの2.7以上）	進路決定率：97% 就農率：74% ①進路指導 ・コース別学習実施：全学生100%受講 ・キャリアコンサルタントによる指導：延べ140回 ②就農支援 ・就農ガイダンス(5/16)、就農相談会(6/5)、農業法人等説明会(6/19、2/5、2/18)の実施 5回 ・チャレンジファーム：実践者10人 ③資格取得支援 ・学生1人当たりの資格取得数：2.25	B	【課題】 ・入学後の進路指導、就農支援の強化 【改善策】 ・コース別学習の充実 ・キャリアコンサルタントによる指導 ・就農ガイダンス、就農相談会、企業・農業法人等合同説明会の早期開催 ・チャレンジファーム支援の強化 ・学生による農業機械活用の強化 ・免許、資格取得への支援		
2	【現状】 学習環境は新型コロナウイルス感染症が5類に移行したことにより、ほぼ平常に戻っている。 【課題】 学生の学習機会の幅を広げるよう努めるとともに、スマート農業などに代表されるような最新の農業技術を学ぶことが必要である。 また、授業資料等の紙媒体の削減や学生との連絡等の電子化を進める必要がある。	カリキュラムの充実	①スマート農業授業の拡充 ・スマート農機導入(ドローン、GPSナビキャスタ、うねま局所施肥など) ・スマート農業に関する授業内容の充実 ②学校用グループウェアの導入 ・紙資料の削減、電子掲示板の導入等 ③生産物販売機会の拡大 ・校内での販売実習 ・各種イベントでの販売・接客 ・チャレンジカンパニーでの販売・接客 ④先進農家等体験学習の実施 ・県内農家や富良野での体験学習：39日間	①スマート農業 ・予定したスマート農機が導入され授業に活用されたか ・全学生がスマート関連授業を受けられたか ②グループウェアの導入 ・授業等への活用状況 ③販売機会拡大 ・計画どおりに販売・接客の機会を確保できたか ④先進農家等体験学習 ・派遣先ではトラブル等も無く計画どおり学習できたか	カリキュラムの充実が図られた ①スマート農業授業の拡充 ・スマート農機導入：GPSナビキャスタ ・校内局所施肥を導入 ・スマート農業の授業の受講：全学生100%受講 ②学校用グループウェアの導入 ・学校用グループウェアを1/10から活用開始 ③生産物販売機会の拡大 ・校内での販売実習(計51回) ・若葉祭、大学校祭、ドリームフェスタ等 ・チャレンジカンパニー：販売2回 ④先進農家等体験学習の実施 ・2年生全員が県内、富良野で39日間実施	A	【課題】 ・カリキュラムの見直し ・グループウェアの活用 【改善策】 ・講義内容の見直しと整理 ・スマート農業授業の充実 ・グループウェアを活用し、講義資料のペーパーレス化に取り組むとともに、職員と学生間の連絡を効率化		
3	【現状】 日頃から専攻ごとに施設・設備の適正管理により事故の未然防止を徹底し、学生が学びやすい環境づくりに取り組んでいる。 【課題】 農業機械の操作方法や技術は事前に十分学習させているが、農業機械や施設設備等を使用する実習では大きな事故に繋がるリスクがある。 また、近年の夏の猛暑における学生の熱中症対策が必要である。	農作業実習中の事故ゼロ 熱中症対策の実施	①安全指導の徹底 ・職員研修会の実施 ・実習ほ場におけるGAPの実践 ・実験や実習における指導 ②日常的な施設・設備の点検 ・農業機械・施設の点検・整備 ・実習施設の適正な管理 ③校舎内の施設・設備の定期的な安全点検 ・計画的な巡回による安全点検 ④熱中症対策 ・夏季の休憩場所確保(大・中教室解放・冷房) ・学習前後での健康状況の把握 ・熱中症発生時の対応マニュアルの整備	①実習や実習時に安全指導が徹底されていたか ②日常的に使用する農業機械・施設の点検・整備が行われたか ③校舎内の巡回や定期的な安全点検が行われたか ④熱中症の対策が実施されたか	農作業実習中の事故：1件 (8/3酪農専攻学生が牛と接触で打撲) 熱中症対策の実施(救急搬送はゼロ) ①安全指導の徹底 ・職員研修会の実施 (12/20 VRを用いた安全研修) ・S-GAP自己点検実施(2/26、27) ・実験や実習における指導(随時) ②日常的な施設・設備の点検 ・農業機械・施設の点検・整備(通年) 実習施設の適正管理(通年) ③校舎内の施設・設備の定期的な安全点検 ・計画的な巡回による安全点検(通年) ④熱中症対策 ・夏季時の休憩場所確保 (学生ラウンジ、交流ラウンジ) ・学習前後での健康状況の把握 ・熱中症発生時の対応マニュアルの整備	A	【課題】 ・農作業実習中の安全確保 【改善策】 ・日常の実習における安全確保の徹底 ・実習におけるGAPの実践 ・夏季の実習における休憩時間確保の徹底		
4	【現状】 1年課程では短期野菜専攻・有機農業専攻とも定員を満たしていない。2年課程では花植木学科、酪農学科で定員を満たしていない。 学科・専攻ごとに受験倍率に差が見られ、入学決定者の学習能力に差がみられる。 【課題】 就農意欲と農業実践力の高い学生を確保するため、本校への入学を希望する生徒等の裾野を広げる必要がある。 また、入学者の基礎計算力向上が必要である。	出願倍率 1.5倍 基礎計算テスト全員合格	①学生募集の強化 ・全国の農業系高校、県内の全高校へ学校案内と学生募集の資料送付 ・HP、パンフレット等を活用した特色ある教育活動の積極的な情報発信 ・県内及び近隣都県高校での説明会参加 ・オープン見学会の実施 ・農業高校体験研修及び農業体験講座の実施 ・各地域連携会議、各種イベントへの参加 ②入試方法の改善 ・一般入試の数学I内に基礎計算(単位換算、割合、肥料成分、農業希釈等)の実施 ・面接での質問内容の整理 ③基礎計算学習の徹底 ・入学者に基礎計算に関する教材を学習するよう機会を捉えて徹底	①学生募集 ・募集活動が計画どおりに実施できたか ②入試方法改善 ・一般入試の内容が改善されたか ・面接での質問は効果的に整理されたか ③基礎計算力向上 ・基礎計算力確認テスト結果	出願倍率：1.12倍(2年課程 1.22倍) 入学時基礎計算テスト全員合格 ①学生募集の強化 ・全国の農業系高校、県内の全高校へ学校案内と学生募集の資料送付 ・HP、パンフレット等で情報発信 ・県内、近隣都県高校の説明会参加 ・オープン見学会11回、個別相談会：11回 ・農業高校体験研修、体験講座：8/5、9日 ・各地域連携会議、イベント参加 ②入試方法の改善 ・一般入試の数学I内に基礎計算追加 ・面接での質問内容の整理 ③入学前学習の徹底 ・入学者説明会(2/20)において基礎計算の事前学習を徹底	B	【課題】 ・受験倍率向上と定員確保 【改善策】 ・入試日程の見直し ・農業高校との連携強化 工業や食物学科などの学科を持つ高校への働きかけ ・オープン見学会や農業高校体験研修等の充実 ・農林振興センターや関係団体等との連携充実		
5	【現状】 本校職員の時間外勤務が増加傾向にあり、ストレスチェックの結果も数年来、県及び農林部全体より悪い状態となっている。 【課題】 時間外勤務の増加要因として生産物の出荷や講義・実験の準備に係る労力がある。	生産物販売の効率化 授業の外部化	①出荷労力の削減 ・生産物販売先の集約化 ・集荷体制構築に向けた検討 ②授業の外部化 ・講義や実験が対応可能な外部講師の確保 ・外部講師確保のための予算確保	①出荷労力 ・出荷先が集約化できたか ・集荷体制の目途があるか ②授業外部化 ・外部講師が確保できたか ・講師謝金の予算が確保されたか	生産物販売の効率化：再検討 授業の外部化：67.6% ①出荷労力の削減 ・仲卸との検討(輸送費等の検討の中で中断) ②授業の外部化 ・外部講師の確保 ・講師謝金の予算確保	B	【課題】 ・生産物の集荷体制構築 ・授業の外部化促進 【改善策】 ・集荷体制構築に向けた検討を継続 ・授業の外部化に向け、講師・予算の確保		
学 校 関 係 者 評 価									
実 施 日 令和 7 年 2 月 2 1 日									
学校関係者からの意見・要望・評価等									
卒業した学生の進路については、親元就農や自立就農であれば、卒業後の状況を把握できる。 しかし、就職就農した場合は、その後の状況を把握できていない。学校として学生の卒業後の状況を把握することが必要ではないか。									
講義資料は現役の学生だけではなく、卒業生も閲覧できるなどの対策が必要ではないか。 グループウェアの活用は時代の流れで必要な取り組みであり、今後もしっかりと取り組んでもらいたい。									
酪農専攻における農作業中の事故は安全に配慮していたものの、牛による突発的なものであり、不可抗力な部分もあった。 熱中症対策は昨年度の反省を踏まえ、しっかりと対策がなされていた。 以上のことから達成度はBからAに変更しても差し支えないと考える。									
有機農業専攻は大学校の目玉となる専攻である。 近年は有機農業専攻の応募者数が少ないという状況である。 応募者数を短期的に捉えるのではなく、応募者の状況等を良く分析し、学生募集に取り組んでもらいたい。									
効率的に外部講師へ依頼できるよう、講師のデータベースの整備が必要と考える。									